

能楽雑感・「定家の地謡」

今月の川崎能楽堂での会で、古くからの流友であるT氏が「定家」のおシテを演ずることになり、私に地頭を勤めるよう要請がありました。

数ある謡の中でも、「定家」の地謡は、「砧」同様「扱い」が多くて、地謡を揃える点での難しさは格別です。シテ謡を引き立てるためにも、地謡が情感を盛り上げなくてはならないので、自分流の勝手な解釈で、以下のような留意点をまとめて、地謡の参加予定者にお知らせし、協力をお願いすることにしました。何らかの参考になればと思い、小欄でも紹介させていただきます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1. 五丁表（初同）＝シテの高さでじっくりと謡い出す。「今降る・・のウヲは切り離して「る」で揃う。裏の三行目「まがき」はハネ張りで、五行目の「夕べ」もハネ張りで謡いたいと思います。

2. 七丁裏のクリ＝高めの声調で綺麗に・・。「本ユリ」はあくまでも、じっくりと・・。

3. サシの地謡＝シテの高さで、シテよりもやや運びめに・・。

4. クセ＝謡い出しの「あわれ・・」の「れ」に注意。前クセは丁寧に、後クセの3行ほどはやや引き立てて、四行目の「この御跡・・」からは、確り目になり、五行目「やらで・・」はハネ張りで「蔦紅葉・・」はメラシて出る・同じ行の「纏わり・・」もメラスことに致したく。

5. クセ全般＝概ね中音から下音への変化のときは生み字は意識するものの二段下げはしないことにします。

6. ロンギ＝シテよりも心持ノリ（中入り前のロンギなので、テンポはシテとあまり変えない方が良いでしょう。シテのテンポで判断しましょう）

十丁表二行の「石に残す・・」はハネ張りにせずやや強めに「の」を浮きます。

7. 十一丁二行目からの地謡＝やや引き立てて、ノリ良く出ますが、四行目の「何なかなか・・」から閑やかな調子に切り替えます。この時、音程は変えないで・・。

8. 十二丁表からの地謡＝テンポ（構成）は三段階です。最初は運びめに、十二丁裏一行の「定家鬘・・」から緩め、「ほろほろと・・」は、太線のところをハネ張り風に。同じく、四行目の「この報恩・・」からしつとりと丁寧に雰囲気を変えます。音程は変えないでいきたいと思います。また、最後の「小忌衣」は特に、極く閑やかに謡いましょう。

9. キリ地＝十三丁五行目の「露と・・」はややかケテ、ノリ良く運び出しますが、少しづつ落ち着いた感じにしていきます。

十三丁裏の二行目「故のごとく・・」は、音を「替えて上音」に切り替えて、しつとりと余韻を出すようにしたいものです。

10. 本曲の地謡共通事項＝浮キは、上音、中音に限らず、やや時間差を意識して、生み字を大きく出さず、後ろにずらし加減にしたいのでご注意ください。

以上

馬野正基師

去る10月18日(土)、馬野正基(うまのまさき)師の「砧」を観に行き、久しぶりに能の醍醐味を味わってきました。この会(華諷会)では、馬野師のご子息、訓聡(くにあき、9歳)さんの能「猩々」もあり、仕舞、ワキ、狂言などの演者も錚々たる一流能楽師が顔を揃えていて、終始華やかな雰囲気にはちていました。

しかし、助演で仕舞を舞った鍔之丞師、玄祥師の存在がかすんでしまうほどの感銘を受けたのは、馬野師の謡と舞でした。発声、所作共に強弱・緩慢の使い分けが美しく、流麗でありながら力を秘めた能でありました。

白謡会の会友(それも長老)の中にも、師の大ファンがおられることを、最近知りましたが、さもありませんと納得しています。

49歳の師は、臀部を浮かせて下居するなど、体力も十分おありです。今この時期が、華を見せる頃合いなのでしょうが、更なる進展も期待されて、楽しみです。

謡については、師の発声が極めて変化に富んでいて、それが情感の表現に効果的であることが特徴と言えましょうか。

発声はおよそ3種類、即ち、張りのある高音、力強く透る低音、それに「ため息声」とも言うべき、無声音に近い呼気で、思いつめた情感をメリシ加減に謡う発声。

この第三の発声は、頻発されると嫌みに聞こえますが、砧では2か所ほど使われていて効果的でした。

舞に関しては、これが素人にはなかなか真似のできないことですが、矯めと瞬発の組み合わせ、要はメリハリが絶妙なことで、これは「砧」のような、舞によって存分に感情表現のできる曲においては、実に効果的であると思いました。

以下、私自身が大変参考になったところを挙げてみます。(一例として)

(謡の表現)

①「なに夕霧と申すか」～多くの場合、此処はかなりカカッテ謡われるようであり、注釈もそうになっているが、師はここをむしろさりげなく謡い、最後の「などや音信なかりけるぞ」で、昂ぶることなく、冷たさと悲しさをないまぜにした情感を表現。

②後場のクドキ～静かに、淡々と「さりながら我は蛇淫の・・・と謡い出しながら、「恨めしかりける」の結びで最高潮に達するまで、決してヒステリックにならないで、且つ悲痛感を高めて行き、大ノリの「因果の妄執」でふっと気を変える謡いぶり。(声量のある人でないと出来ない技か)

(舞の表現)

①前場の、「声添えて君が其方に・吹けや風」のところの、胸サシ、扇の仰角の微妙な動き。右足拍子が予想外に大きくて効果的。

②同じく前場、「波打ち寄せよ」では、観世も梅若も標準の形としては「打ち込み」となっているが、これをズカリとした「胸ザシ」で表現。

③中入前、「さてははや真に・・・」で、「両シオリ」しながらドスンと下居して「死」を表現。

④後場の「呵責のこえのみ」で、ずかずかと四足出、杖を放す表現に納得。杖も意思をもって放す。(藤戸とは異なるか?)

⑤「そも、かかる人の心か」の哀しさと鬱屈した怒りの表現力。(内部の筋肉を使っている?)

⑤キリの前、「思い知らずや・怨めしや」は予想以上にさりげなく、地味だったが、この方が正解であろう。

ところで、地頭は浅見真州師でしたが、鍬仙会系の地謡は力強い反面、ざらざらしたところがあって、これが宗家派風に綺麗に謳いあげてくれたらもっと良かったらうにと思いました。